

「スマート農業の死角」を読んで

この記事を読んで、スマート農業がもたらす技術的な進歩の裏にある問題について深く考えさせられた。AI やドローン、5G 通信などの技術を活用して作業の自動化や効率化を進めることは、これからの農業にとって重要なことである。しかし筆者は、そうした技術の多くが大規模経営を前提としており、日本の農業の中心である家族経営の農家には必ずしも合わない現状を指摘している。私はこの点に強く共感した。農業は単なる生産活動ではなく、地域社会や家族のつながりの中で長い年月をかけて受け継がれてきた営みである。効率を重視するあまり、そうした人間らしい関係や地域の多様性を失ってしまうことは、本来の農業の姿をゆがめてしまうのではないかと感じた。また、筆者が述べている「家族対応の技術をめざせ」という言葉には、技術の進歩を否定するのではなく、「誰もが使いやすい形で技術を活かす」という前向きな姿勢が込められていると感じた。大企業や一部の大規模農家だけでなく、小さな家族経営の農家や地域の人々にも恩恵が行き渡るような仕組みづくりこそが、持続可能な農業の実現につながると思う。スマート農業は確かに未来を感じさせる取り組みである。しかし、どんなに便利な技術も、それを使う「人」の立場を忘れては意味がない。技術の導入によって効率を高めるだけでなく、地域の個性や人の温かさを守りながら発展していくことこそ、これからの日本の農業に求められる姿だと感じた。

「農業農村工学の「つなぐ・つながる」を考える」を読んで

この文章は、農業や農村での ICT や IoT の活用について書かれているが、行間からは単なる技術論ではなく、「人と地域のつながりの重要性」を強く訴える著者の思いが伝わってくる。著者は、インターネットやコンピュータの発展を体験してきた立場から、技術が進歩しても人ととの関係が希薄になってはいけないという危機感を抱いているように感じた。特に、地方や農村では通信環境や人材の不足により ICT の導入が遅れており、その結果、地域が取り残されてしまう現状への問題意識がにじんでいる。

また、文中には「Society 5.0」や「超スマート社会」といった言葉が出てくるが、著者はそれらを無批判に受け入れてはいない。むしろ、現場の実情を無視した技術導入に対して慎重な立場をとっている。農業の課題は単なるシステム化では解決できず、現場で働く人々の知恵や経験と結びつくことが必要だと考えているのだ。技術はあくまで人と人、地域と地域をつなぐための「道具」であり、それ自体が目的ではないという考えが読み取れる。

私はこの文章を読んで、ICT や IoT という言葉が単に便利さを追求するものではなく、人のつながりを再生するための手段として語られている点に共感した。技術の発展によって社会が効率的になる一方で、直接的な人間関係が薄れていく現代において、「つなぐ・つながる」という言葉は非常に重い意味を持つ。

この文章は、技術と人間社会の関係を見直すきっかけを与えてくれるものである。著者の考えには、農業や農村に限らず、私たちの生活全体に通じる普遍的なメッセージが込められている。技術の進歩をどう活かすかは結局のところ人の姿勢次第であり、私たち一人ひとりが

「つながり」を意識して行動することが、より良い社会の実現につながるのだと思った。